

### 3 Primary PTCA を行った急性心筋梗塞の長期予後に及ぼす影響因子の検討

五十嵐 裕・今野 拓・佐藤 匡  
小島 研司

鶴岡市立荘内病院循環器科

Primary PTCA をおこなった急性心筋梗塞の長期予後に及ぼす因子の検討をおこなった。対象は12時間以内に Primary PTCA で再灌流に成功しTIMI 2の血流と狭窄率50%未満が得られた連続症例127例である。Primary endpointとしては心原性死亡、心筋梗塞の再発、狭心症の再発とした。平均35±24ヶ月の観察期間に Primary endpointは21例に起こった(心原死2例、心筋梗塞再発8例、狭心症の再発11例)。これらの心事故群ではLp(a)が有意に高値で多枝疾患の頻度が有意に高かった。Lp(a)を75 percentile(47 mg/dl)で2群に分けると、Kaplan-Meier法ではLp(a) < 47 mg/dl群と多枝疾患の無い群が有意にEvent-free survivalは良好であった。Cox proportional hazards解析では、Lp(a) > 47 mg/dl (RR 5.5, 95% CI 2.0-15.0, p = 0.007), multivessel disease (RR 5.3, 95% CI 2.0-13.7, p = 0.006), Statin使用 (RR 0.20, 95% CI 0.05-0.78, p = 0.0207)が独立した予測因子であった。Lp(a)値と多枝疾患はPrimary PTCAを行った急性心筋梗塞の長期のevent-free survivalを決定する独立因子であった。Statinの使用はevent-free survivalに対して好ましい因子であったが結論にはさらに検討を要する。

### 4 ACE阻害薬ペリンドプリルのAT阻止作用と心不全モデルラットにおける効果について

平林 賢一・斎藤 由紀・Mir. I.I. Wahed  
馬 梅蓄・G. Narasimman・阿部 佑一  
文 娟・渡辺 賢一・中澤 幹雄\*  
太刀川 仁\*\*・小玉 誠\*\*  
相澤 義房\*\*

新潟薬科大学臨床薬理学  
新潟大学医学部保健学科\*  
新潟大学大学院医歯学総合研究科  
循環器分野(医学部第一内科)\*\*

【目的】心不全モデルラットに、ACE阻害薬で

あるペリンドプリルを投与し、血行動態、心筋組織中のTGF-β1、コラーゲンⅢのmRNAの発現を検討した。

【方法】9周齢のLewisラットをブタ心筋ミオシンで感作し、自己免疫性心筋炎発症4週間後の心不全ラットにペリンドプリル0.02mg/kg/day (Group - P0.02) 2mg/kg/day (Group - P0.2), 2mg/kg/day (Group - P2), コントロールとして0.5%メチルセルロース (Group - V) を1ヶ月間経口投与した。投与後、中心静脈圧、左室収縮期圧、左室拡張末期圧、±dP/dtを測定した。更に、心筋組織中のTGF-β1、コラーゲンⅢのmRNAを検討した。

【結果】Group - P0.2で心体重比は有意に減少した。Group - P2では、体重、心重量、心体重比が著明に減少した。心拍数は各群間に有意差は見られなかったが、Group - P0.2では、中心静脈圧、左室拡張末期圧の有意な減少が見られ、心筋収縮力は有意に増加した。また、Group - P2では、平均血圧、左室収縮期圧、左室拡張末期圧が、何れも著明に低下した。心筋組織中のTGF-β1、コラーゲンⅢのmRNAについては、Group - Vでは上昇が見られたがGroup - P0.2、-P2ではそれらが減少した。

【総括】ペリンドプリル投与により、心血行動態の改善及びTGF-β1、コラーゲンⅢ mRNA発現の低下が見られた。

### 5 バージャー病の疫学調査

西川 尚・小澤 拓也・阿部 暁  
田中 孝幸・那須野暁光・林 学  
吉田 剛・柏村 健・太刀川 仁  
福永 博・目崎 亨・尾崎 和幸  
土田 圭一・大倉 裕二・中村 裕一  
堀 知行・加藤 公則・埜 晴雄  
小玉 誠・相澤 義房

新潟大学大学院医歯学総合研究  
科循環器学分野

【背景】バージャー病は病因に喫煙との関連が指摘されているが不明点も多い。また、進行する

と四肢の潰瘍や壊疽を形成し、切断に至ることもまれではない。

【目的】バージャー病の進行と喫煙との関連について調査する。

【方法】対象は新潟県内のバージャー病の特定疾患登録患者で調査に協力が得られた218名(男203名,女15名)である。平均11.9年間調査した。発症年齢は44歳(男43.9,女44.7歳)で,経過中に切断術に至った症例の臨床像,喫煙状況を重回帰分析で検討した。

【結果】初診時のFontaine分類は,I度21人,II度42人,III度56人,IV度89人で,切断術を施行された患者はそれぞれI度0人(0%),II度8人(19%),III度11人(20%),IV度49人(55%)であり,IV度の患者で切断術の頻度が大であった( $P < 0.0001$ )。また,切断術に関して年齢,性差,発症年齢,禁煙の実施,内科的治療の内容,初診時のFontaine分類,家族歴の計9項目のうち,重回帰分析では初診時のFontaine分類のみが独立した予後規定因子であった( $P < 0.05$ )。また,I度の患者では,切断術は回避された。

【考察】今回の調査では禁煙により四肢や指趾切断が回避されることは確認されなかった。症状がFontaine I度レベル時期の早期診断早期治療が,切断術の回避に結びつくと考えられた。

## 6 下殿動脈狭窄による間歇性跛行

田崎 麻子・悴田 亮平・会澤 彰  
藤田 聡・池田 佳生・北沢 仁  
高橋 稔・石黒 淳司・佐藤 政仁  
岡部 正明

立川総合病院循環器内科

症例は80歳男性。平成11年10月頃より1000m歩行にて左殿部痛出現(Fontaine II),平成11年10月29日下壁心筋梗塞にて当院紹介入院。入院時聴診上,左臍径部に血管雑音が認められた。左ankle brachial index (ABI)は0.9であった。慢性閉塞性動脈硬化症(ASO)疑われ,下肢血管造影施行し左内腸骨動脈,左外腸骨動脈,左下殿動脈に有意狭窄を認めASOの診断。その

後100m歩行にて間歇性跛行出現するようになり,平成12年1月25日左外腸骨動脈90%狭窄に対しpercutaneous transluminal angioplasty (PTA),stent留置術(Palmaz stent 8.0×12.7mm Palmatz stent 8.0×8.5mm Palmatz stent 7.0×9mm)を施行し0%に改善した。PTA後も300m歩行にて間歇性跛行認められたため平成12年4月10日左下殿動脈90%狭窄にPTA,stent留置術(MLK 3.5×15mm)を施行し0%に改善した。左下殿動脈のPTA後症状の消失を認めた。平成12年12月頃より200m歩行にて左殿部痛認められASO再燃。ABI左0.91右0.98であった。平成13年1月16日下肢血管造影にて左大腿動脈90%狭窄,左下殿動脈90%の再狭窄を認めた。左下殿動脈にPTA施行し0%に改善し症状の消失を認めた。本人根治治療希望にて平成13年4月3日左大腿動脈90%狭窄にPTA,stent留置術(Easy Wall 8.0×20mm)施行し0%に改善。ABI左0.96であった。平成13年8月頃より間歇性跛行認めた。ABI左1.00右1.06であった。平成13年10月30日下肢血管造影施行。左外腸骨動脈,左大腿動脈に再狭窄認めず。左上殿動脈99%の新規病変と左下殿動脈に90%の再狭窄を認めた。左上殿動脈99%狭窄にPTA,stent留置術(Easy Wall 5×25mm)左下殿動脈90%狭窄にPTA施行し各々25%以下に改善し症状消失を認めた。本症例は,間歇性跛行の責任病変が下殿動脈に認められた貴重な症例であったので報告した。

## 7 左内胸動脈のSequential bypassについて

曾川 正和・名村 理・中山 卓  
島田 晃治・林 純一

新潟大学大学院医歯学総合研究  
科呼吸循環外科学分野

冠動脈バイパス術において,動脈グラフトの長期開存率が静脈グラフトより良好であることより,近年,動脈グラフトを多用することが多くなった。新潟大学医学部附属病院第二外科でも同様な傾向があるが,特に,in situとして使える動脈グラフトは両側内胸動脈と胃大網動脈の3本と数